

## 学校スポーツコースからみたスポーツ学の10年

柴田 俊和<sup>1)</sup>

### The Outlook on ten years of the Sport Science(Sportwissenschaft) viewed from Sport and Physical Education course

Toshikazu SHIBATA

Key words : 学校スポーツ, スポーツ教育学, スポーツ学

#### 1. はじめに

昨年度の本学研究紀要第9号の「学校スポーツコースからみたスポーツ学」において、学校スポーツコースの英語表記をSchool Sport courseではなく、Sport and Physical Education courseとした理由を示した。この表記は、全国体育系大学学長・学部長会教育の質保障委員会による調査報告「体育・スポーツ学分野における教育の質保障」(2011, p.3)において、我々の学問分野の名称を「体育・スポーツ学」と定義していることと同義であると捉えている。

本稿においては、学校スポーツコース Sport and Physical Education courseは、「体育・スポーツ・健康に関する教育に携わる人材を育成することを教育・研究の主目的とするコース」とし、学校スポーツコースからみた開学から10年たったスポーツ学との関係について論考を進めていきたい。

#### 2. 戦後60年の学校体育の歩みと「体育・スポーツ学」

我が国唯一の学校体育に関する専門雑誌である大修館書店の「体育科教育」2013年1月号において、「戦後学校体育を切り拓いたあの人に学ぶ」とした創刊60周年の特集が組まれた。巻頭の論稿が高橋健夫(2013)の『「体

育科教育』60年の歩みと戦後学校体育」であった。その中で、60年前の体育系大学・学部が体育教員養成を主たる目的としており、また「体育学」の全ての研究分野が学校体育や体育科教育に大きな関心を向けていたため、長い歴史の中で染みついた「体育の特殊性」を払拭して、他の知的教科や教師に比肩するアカデミックな体育科教育や体育教師の地位を確立するために、先進諸外国に劣らぬ日本の体育科教育を構築するためにこの雑誌を発展させようとして、体育学の全ての研究分野の研究者に加えて、小・中・高の体育実践分野のリーダーや体育行政のスペシャリストでこの雑誌の編集メンバーが構成されたことを紹介している。このように、わが国におけるスポーツに関する学問的アプローチは学校体育に関する学際的な研究体制から始まったと言えるだろう。その名残が前述のように我々の研究領域の総体の名称である「体育・スポーツ学」 Sport and Physical Educationに現れており、「スポーツ学(Sportwissenschaft: Sport Science)」と表記するに至らなかった理由だともいえる。

その後、再構築された体育科教育学では、1964年の東京オリンピックに関連して競技力の向上を支援するスポーツ科学が急速に発展したことや、1970年代の先進諸外国の体育の思潮の変動を受けて、スポーツ教育の意義が

1) 生涯スポーツ学科

評価されるようになる。さらに、スポーツへの量的拡大を目指した「スポーツ・フォア・オール」運動は、質的發展を目指す「生涯スポーツ」運動へと移行し、教育界でも「生涯スポーツ」を志向する体育学習に関する実践が研究の対象となっていった。さらに、1990年代後半には、いじめ、引きこもり、不登校、残忍な事件、荒れる学校等々、子どもの心や社会性が重大な教育問題になり、子どもの体力低下が一層深刻になっている実態が示されると、子どもの心と体の問題に対応することが体育科教育の重要課題となった。また、この頃には世界的に「学校体育の危機」が話題になった。わが国でも大学カリキュラム大綱化の波を受けた一般体育の選択制化などの体育の危機的状況の中で、先進諸国では一様にアカウントビリティに応える体育の在り方が議論されるようになり、体育のナショナルスタンダードづくりが始まった。

筆者も参加した、大阪で2000年に開催されたスポーツ教育学会(国際大会)では、「教科体育の存在意義を問う」というテーマのもと、世界の教科体育が置かれている危機的状態とその対処状況の報告が、イギリス、アメリカ、ドイツ、韓国、日本の研究者によって行われた。そこでは、各国共通の課題として、競技志向の学校体育に批判的であること、教科指導の教育的意義を明確に打ち出す必要性があること、良質の授業の提供と体育教師養成システムの改善が必要であることが示された。また、各国とも体育の目的として「身体的教養を備えた人物」の育成を明確に打ち出していた。ここでの議論を受けて、今回の学習指導要領の改訂においては、学校体育のアイデンティティを明確にし、体育的学力を培う体育の在り方を明示するに至った。

### 3. 体育科教育とスポーツ教育

体育科教育とスポーツ教育の違いについて、日野克博(2010)がわかりやすく解説している。以下にその要点を示すことにする。

体育科教育とは、学校教育のなかの体育(保健体育)科を基盤に、運動やスポーツを内容とし、これを媒介とする教育である。体育科教育の中心は授業になるが、よい授業を実現していくためには、授業を方向付けている制度的条件(学校教育法や指導要領)や環境条件(地域や家庭)、また、学校体育の諸領域でもある「運動部活動」や「体育的行事」も深く関係しており、これらも授業との関連で体育科教育の一部として検討していく必要がある。

スポーツ教育では、スポーツを教育の対象にすることで、教える内容をより具体化させているのが特徴である。そこでは、文化としてのスポーツを継承・発展させるだけでなく、スポーツに主体的に取り組むことのできる人材の育成が意図されている。1970年前後、ドイツ語圏の「体育」から「スポーツ」への名称変更に触発されて、わが国においても、「体育」から「スポーツ」への名称をめぐる議論が展開された。それは、生涯スポーツを志向する時代状況を受けて、スポーツが持っている教育的価値に注目し、その教育可能性に基づいて内容を設定しようとする新しい考え方であった。教育の対象が、学校教育から生涯スポーツ全般へと拡大し、学校のスポーツ教育(教科スポーツと課外スポーツ)と学校外のスポーツ教育(クラブスポーツと未組織スポーツ)へと広がった。このように、スポーツ教育は学校内の体育授業に限定せず、運動部活動やスポーツ大会を含めた課外スポーツや学校外で行われている競技スポーツや社会スポーツを包括して捉えられている。特に、生涯スポーツを志向することで、学校内のスポーツと学校外のスポーツの結びつきを強めている。

この章での論点である体育科教育とスポーツ教育の違いについては、理念的には異なるものの、実態としては重なることが多く、学会等の研究発表で扱われている対象が「学校で行われる体育の授業」であることが多いと

いう共通点から、大差があるとは言えない。しかし、体育授業を具体的な研究の問題・対象とする「体育科教育学」とスポーツ教育を研究の問題・対象とする「スポーツ教育学」とでは、学校の体育授業の枠にとらわれるかどうかでその差異が認められると言えよう。

ここでの論考から、時代的情況や社会的要求を反映したこれからの生涯スポーツを推進するためには、その研究の対象を学校体育だけでなく学校外へと拡大したスポーツ教育学が本学の学校スポーツコースにおいて扱われるべき学問領域であり、前述のように学校スポーツコースの名称をSport and Physical Education courseと表記した所以でもあると言える。

#### 4. スポーツ科学とスポーツ教育

月刊誌「体育科教育」の2006年9月号において、「スポーツに関わる研究は多岐にわたり、飛躍的に進歩しているが、スポーツ指導や授業場面で、その成果が十分活かされているとは言いがたい。指導に活かせるような最前線の情報をわかりやすく紹介する。」として、「スポーツ科学最前線—スポーツの知を究めよう—」と題する特集が生まれ、スポーツ科学の様々な領域からの学校体育に向けた研究成果や提言が示されていた。

その最初の論考で、高橋幸一(2006)が「変貌するスポーツ科学」と題して、興味深い問題提起を行っている。スポーツの捉え方や研究での扱い方をドイツを中心にした概観として示していく中で、競技スポーツが1960年代以降世界的な共通語になり、スポーツの概念に競技スポーツ、生涯スポーツ、障害者スポーツ、高齢者スポーツ、遊び、ダンス等が含まれるようになり、学校体育でもスポーツ教材が多くなったこと示している。そして、スポーツ界では国力や体制の優位性を誇示するものとして競技力の向上が過剰に目指されるようになり、科学的な研究を競技力の向上に利用するためにスポーツ医学やスポーツ生理

学が確立されたこと、教育学の一分野としての「体育学」ではなく、スポーツ科学の可能性が検討されるようになったことを示している。スポーツを諸科学から別々に研究するのではなく、専門分科学を学際的に総合する科学理論の構築をめざして、単数表記の「スポーツ科学」(Sportwissenschaft: Sport Science)が登場したという。

この流れは、学校体育を体育科教育として再構築しようとした60年前のわが国の体育学研究者们の思いと通じるところがあり、スポーツ学における学校スポーツコースでの研究や教育の在り方を検討するにあたって常に心掛けなければならない観点でもある。

しかし、スポーツバイオメカニクス、スポーツ医科学、スポーツ心理学、トレーニング科学、スポーツ経済学の個別領域における研究成果が競技スポーツの実践や組織の問題解決に大きく貢献をしていることや、人間性を重視するスポーツ哲学、スポーツ教育学、スポーツ人間学などの学問領域も、競技スポーツの意義や倫理、無制限のトレーニングから選手を守ること、政治や経済やメディアからの不当な要請を避けることを研究することによって、間接的に競技スポーツの発展に貢献しているとも述べられている。

また、スポーツ界における、競技力に対する医学的操作、スポーツの社会的意義、タレント発掘やその能力向上、健康、障害者スポーツ、体力向上、スポーツと国家、宗教、芸術、財政、遊戯、遺伝子工学との関係、学校スポーツ等の問題が山積されており、このような問題は、自然科学、人文科学、社会科学が同等の権利を持って参加する学際的な研究によってのみ解決されることができるとも述べられている。

しかし、前述のようなスポーツ科学の研究成果とスポーツ実践との関係については消極的な評価が未だに存在すること、スポーツ科学と称しても、その研究成果においては運動科学や健康科学、身体科学の領域に留まって

いることが多いとも指摘している。

ここまで高橋が紹介したような、旧来の教育学の一分野として捉えられていた「体育学」から脱却した、新しい概念である「スポーツ学」を構築し発展させることを目指して設立された本学において、ドイツにおいてオモ・グルーベが求めたような専門分科学を学際的に総合する科学理論の構築をめざした「スポーツ科学」(Sportwissenschaft: Sport Science)が、「スポーツ学」としてこの10年間でどこまで実現されているのかを現時点で検討されなければならない。当然ながら、スポーツ科学の一分野としてのスポーツ教育学を確立し、保健体育教員を養成するためのカリキュラムの検討を進めることも、学校スポーツコースの所属する教員としての課題であると考えている。

## 5. スポーツ学における学校スポーツコースのこれから

AERA Mookシリーズで1997年に出版された「スポーツ学のみかた」の巻頭論文である寒川恒夫の「スポーツ学への招待」において、スポーツ学に関する基本的な解説がなされている。前章で検討したスポーツ科学という名称についても、ドイツ語圏のSportwissenschaft (英語圏のSport Science) の訳語であり、「スポーツ学」と同義であると述べている。

また、寒川(2013)は第2章で引用した体育科教育の特集において、「アカデミック・アイデンティティの提唱者 岸野雄三」の紹介文の中で、岸野が教育問題分野を含めたスポーツ科学の全体構造を明らかにする必要性やスポーツ科学と教育学のアカデミック・アイデンティティを構築する必要性を提起していたことを示している。さらに、寒川は、教育学がスポーツ科学へ発展したことがもたらした高度専門分科とそれゆえに親科学への

解体吸収の恐れは、学校体育をめぐる問題の科学論によって、スポーツ科学の諸専門学を一つに繋ぎ止める可能性を孕んだ核になるとも述べている。

これからの学校スポーツコースにおける研究と教育の在り方を考えた時、学校スポーツコースの教員だけがスポーツ教育に関する研究を推進するのではなく、スポーツ学に関わる全ての研究領域の教員が協力して、学際的な視点から体育や学校スポーツの在り方を検討する必要があるのではないかと考えている。また、逆の立場として、教育学的な学校体育や学校スポーツの立場から競技スポーツ領域の研究や生涯スポーツ領域の研究に取り組む必要があるとも考えている。そのような取組こそ、Sportwissenschaftとしての「スポーツ学」を更に発展させていく力になるのではないかと考えている。

## 参考文献

- ①全国体育系大学学長・学部長会・教育の質保証委員会(2011):「体育・スポーツ学分野における教育の質保証」
- ②日野克博(2010):「体育科教育」と「スポーツ教育」では何が違うのですか?, 体育科教育58-8, 大修館書店, pp.44-45.
- ③寒川恒夫(1997):「スポーツ学への招待」AERA Mook スポーツ学のみかた, 朝日新聞社, pp.4-8.
- ④寒川恒夫(2013):「アカデミック・アイデンティティの提唱者 岸野雄三」, 体育科教育61-1, 大修館書店, pp.30-31.
- ⑤高橋幸一(2006):変貌するスポーツ科学, 体育科教育54-9, 大修館書店, pp.10-13.
- ⑥高橋健夫(1997):「スポーツ教育学」AERA Mook スポーツ学のみかた, 朝日新聞社, pp.42-43.
- ⑦高橋健夫(2013):「体育科教育」60年の歩みと戦後学校体育, 体育科教育61-1, 大修館書店, pp.10-17.